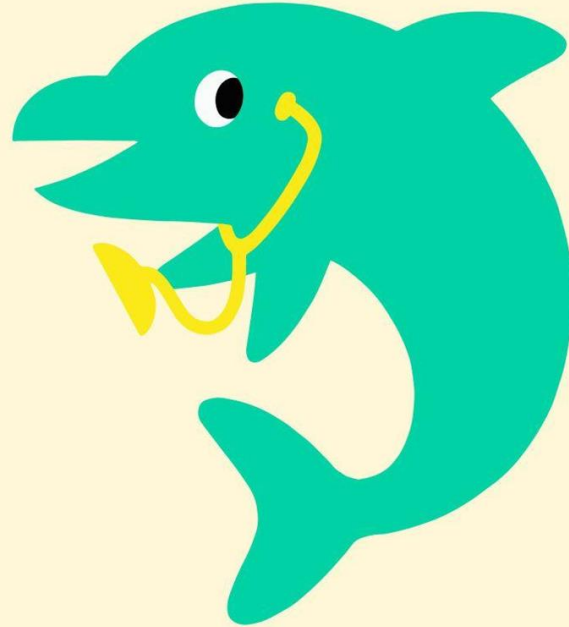


## レベル2：子ども・若者意見聴取のファシリテーション手法



こどもの声を聴く  
こども聴診器  
養成講座

# もくじ

- はじめに
- 意見聴取のファシリテーション
- 対話の場の流れ
- 子ども・若者の意見聴取をめぐるよくある質問



はじめに

# 本研修の目的

本研修では、**職員が子ども・若者の意見聴取を実施し、  
具体的にこどもの声を聴く手法であるファシリテーションの  
基礎スキルを取得することを目的**としています。



# 意見聴取のファシリテーション

ファシリテーターのマインドセット・スキルセット

# ファシリテーションとは？

ファシリテーターは、話し合いを主導する「司会者」ではありません。  
こどもの意見を引き出し、支え、偏らないよう、**活動が容易になるよう場を整える人**です。

辞書をひくと...

Facilitate = 促す、促進する、**容易にする**

ファシリテーターは  
司会ではない

## ファシリテーションとは

人々の活動が**容易にできる**よう支援し、**うまくことが運ぶ**よう舵取りすること。  
集団による問題解決、アイデア創造、教育、学習等、あらゆる知識創造活動を支援し促進していく働きを意味します。  
その役割を担う人がファシリテーターであり、会議で言えば進行役にあたります。

出典：日本ファシリテーション協会

# ファシリテーターに必要なスキルとマインド

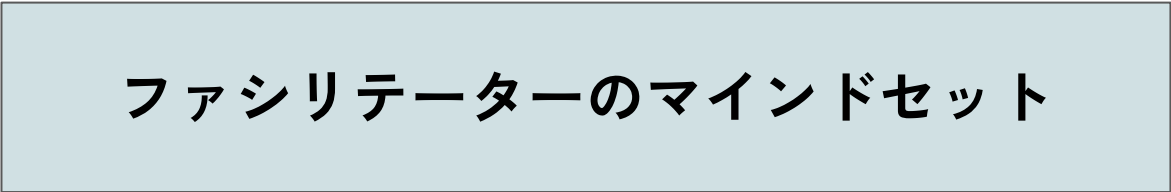
場を生かすには、特別なスキルをいくつも身につけること以上に、「**どんな姿勢で向き合うか**」という**マインドセットが土台**になります。

この土台がないままスキル（技術）だけを重ねても、子ども・若者の声は十分に引き出せません。安心と信頼をつくるのは、まずファシリテーター自身の心構えです。



ファシリテーターのスキルセット

場面に応じて  
使い分けできるスキル



ファシリテーターのマインドセット

土台となる心構え

# ファシリテーターの3つのマインドセット

ファシリテーションの核になるのは、テクニックではなく「**どう向き合うか**」という姿勢です。子ども・若者の声を本当に受け止めるためには、目の前にある言葉だけに頼らない感度と心構えが必要です。

次の3つは、意見聴取の場を支えるファシリテーターのマインドセットの基本です。

## 本当の声を聴く

目の前の言葉も大切であると同時に、目の前に表れている言葉の奥にある本当に伝えたいことはなにかを意識する。

## 言葉にならない声を聴く

その場に表出している言葉が**本当の意見なのかを常に疑う**。言葉以外の表現方法も大切にする。表現できる環境づくりも重要。

## 翻訳機の役割を果たす

子ども・若者の意見が**反映されやすくなるように言葉を翻訳していく**。ただし、勝手に解釈しない。（意見反映プロセスを意識しながら意見を聴く）

# 意見聴取に向けてのポイント

ファシリテーターは、自分の意見や価値観を「ゼロ」にする必要はありません。

大切なのは、それらを自覚し、**場に持ち込まない姿勢**です。

子ども・若者の声を引き出すファシリテーションは、無意識のふるまいや一言一言に神経を研ぎ澄ますところから始まります。

観点（例）	ポイント
意見を押し付けない／誘導しない	ファシリテーターが「正解」を提示してしまうと、子どもは本音を言いにくくなる。無意識のうなずきや語尾のトーンにも注意する。
自分のバイアスを自覚する	経験・価値観・願いを「否定」する必要はない。それらが「子どもと違う」ということを意識し、線を引く姿勢を持つ。
受け止める ≠ 受け入れる	子どもの意見を「そのまま肯定」しなくてもよい。否定も評価もせず、「聴く」ことに徹する。
権威勾配を意識する	ファシリテーターは「大人」「自治体職員」というだけで力を持っている。対等な空気をつくるための工夫が必要。
服装・座り方・挨拶からファシリテーションは始まる	スーツ、机の配置、声のトーン...こうした細部が場の空気を左右する。「神は細部に宿る」の精神で、環境とふるまいを丁寧に整える。

# ファシリテーターの問いかけで深める

子どもが口にした言葉は、必ずしも「本当に伝えたいこと」そのものとは限りません。  
問いかけによって背景や理由を深めていくことで、その奥にあるニーズや願いが初めて見えてきます。  
ファシリテーターの役割は、表面の言葉にとどまらず、その先を一緒に探っていくことです。

## 出された意見

「学校にエレベーターをつけてほしい」



## 意見の背景

「怪我をして階段をあげられないときに、  
授業を受ける方法に配慮してほしい」

「カフェをつくってほしい」



「放課後に友達同士で勉強ができるスペースがない。  
公共施設だと喋ってはいけないと言われる」




「テーマパークを整備してほしい」



「学校生活で思い出に残るような体験ができる場所、  
みんなで遊びに行ける場所が地元がない」

# ファシリテーターの問いかけで、広げる・深める・まとめる

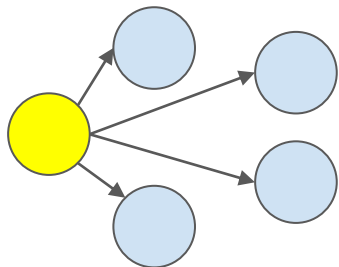
対話の際は、広げる・深める・まとめる、を意識して、適宜問いかけをしましょう。

	コツ	問いかけ
広げる 	意見を並べてみる ジャッジはしない	「どう思う？」 「それ以外に、何かある？」
深める 	意味を聞いてみる 理由を聞いてみる	「それって、どういうこと？」 「なんで、そう思うの？」
まとめる 	前に進もうとする 共通点を探る 第三の道を探る	「で、どうする？」 「共通してるところって？」 「新しいアイデアある？」

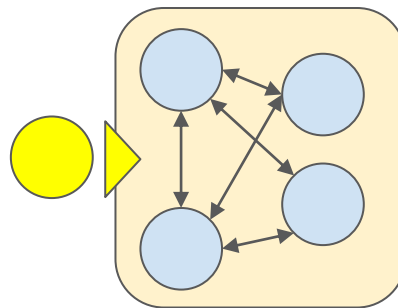
# 集団に対して意見を深める問いかけの方法

グループで意見反映を進めるときは、**子ども同士でも意見を深め合える**ように、オリエンテーションをしましょう。

個々に働きかける



集団に働きかける



「共感」 → 「同じように感じたことがある人はいる？」

「違い」 → 「私はちょっと違う意見だなって人はいる？」

# 対話の場の流れ

# テーブルファシリ実習

意見聴取の場は、いきなり本題に入るのではなく、安心感を育てながら対話を深め、きちんと終わることが大切です。

場の流れを丁寧にデザインすることで、子ども・若者が安心して自分の声を届けやすくなります。

## 場のながれの例

- アイスブレイク・チェックイン
- グラウンドルールづくり
- 話を聴く
- 振り返り・確認
- チェックアウト

# アイスブレイク

アイスブレイクには、場の緊張をほぐし、安心して話せる空気をつくる力があります。やり方はひとつではなく、対象年齢や場面に応じてさまざまです。実践しながら、自分に合ったスタイルを見つけていくことが大切です。

気になる本を手にとって、まずは職場等でも「やってみる」ところから始めましょう。

## アイスブレイクの参考書籍



# グラウンドルールの例

子ども・若者が安心して話せる場をつくるためには、一方的な説明ではなく、**みんなでルールを確認するプロセス**が大切です。

グラウンドルールの例は、**話しやすさと信頼関係を支える土台**です。

また、ルールを一緒につくると、「自分もこの場の一員だ」という感覚も生まれやすくなります。

## グラウンドルールの例

### おやくそく



けつろん

- ひとつの結論を決める会ではないので、違いを受け止めあおう

きるく

- だれがどんな意見を言ったのかは記録に残しません  
(ここで聞いたことはここだけの話にしよう)
- 「こんなこと言ってもいいのかな」と思うことを言ってみよう (だれも怒らないよ)

# 「相手の話をそのまま聴く」を難しくする3つのこと

「相手の話をそのまま聴く」ことはシンプルに聞こえますが、実はとても難しいことです。私たち自身の思い込み、目的優先、自己の投影によって、**子どもの声やサインを聴き逃したり見逃しやすい自分の状態が生まれてしまいます。**

まずは、自分の中にあるこの3点を意識していきましょう。

## 1 思い込み

多分この子はこう思っているに違いない！



〇〇するのは、  
～～に違いない！

思い込みを外すことで、子ども達のありのままの姿が見えてくる

## 2 目的優先

じっとしてほしいのに、  
じっとしてもらえないなあ。



ここは勉強する場なのに  
うるさいなあ。

目的を優先せず、まず子どもの声を聴く

## 3 自己の投影

自分もこうだったから...  
この子もこう思っているだろう



このくらいの年齢なら  
こう考えるはず

自分の経験をもとに勝手に判断しない

# こどもの意見を深める問いかけ

子どもたちの意見をより深く理解し、考えを広げてもらうためには、「はい・いいえ」で終わらない問いかけが大切です。意見を深めるための問いかけのタイプと具体例を紹介します。

## 基本的な深掘り（考えの背景を聞く）

- どうしてそう思ったの？
- そう考えたきっかけは何？
- いつからそう感じていたの？
- どんなときにそう思うことが多い？
- それを言葉にすると、どんな気持ち？

## 理由や根拠を探る

- そう思うのは、どんな理由から？
- 他の人も同じように感じていると思う？
- それが起こると、どんな良いこと（または困ること）がある？
- どうしてそれが大事だと思う？

## 具体化・イメージを広げる

- たとえば、どんな場面を想像してる？
- もしそれを絵に描くなら、どんな絵になる？
- 「もっと○○」って、具体的にはどんな感じ？

## 別の視点を促す

- もし友だちが違う意見を言ったら、どう思う？
- 立場が先生だったら、どう感じるかな？
- 小さい子（またはお年寄り）だったらどう思うと思う？
- ほかのやり方があるとしたら、どんな方法がある？

## 意見を比べて広げる

- Aと比べると、違うところはどこ？
- AとBならどっちのほうが自分にとって大事？
- それってAじゃダメ？どんなところが違う？

# 子ども・若者の意見聴取をめぐるよくある質問 Q&A

# 子ども・若者の意見聴取をめぐるQ&A

## Q1. 「子どもの声を聴く」と言っても、どんな場面で必要なのでしょうか？

教育や福祉だけでなく、公園整備、防災、交通、安全、まちづくりなど、日常生活に関わるあらゆる分野が対象です。子ども・若者はひとりの生活者としてまちで暮らしており、あらゆる政策が関わってくることになります。

## Q2. 子どもたちの意見をすべて取り入れなければならないのですか？

すべてを採用する必要はありません。重要なのは「正當に考慮すること」と「どう扱ったかを伝えること」です。反映できなかった理由も丁寧にフィードバックすることで、子どもたちの信頼と次への参加意欲が育まれます。

# 子ども・若者の意見聴取をめぐるQ&A

## Q3. アンケートとワークショップ、どちらが良いですか？

どちらが良いというわけではなく、目的によって使い分けます。

- ・「多くの声を幅広く集めたい」→アンケート
- ・「一つひとつの意見を深めたい」→ワークショップ

組み合わせることで、「量と質」の両方を確保できます。

## Q4. テーマ設定はどうすればよいですか？

子どもが「自分ごととして話せる」テーマを選ぶことが大切です。行政の課題から出発するよりも、「子どもが関心を持つテーマ」から入る方が深い対話につながります。

## Q5.小学生や中高生など、年齢が違うときはどう対応すればいいですか？

年齢・発達段階に応じて問いの形を変えましょう。問いの設定の仕方によって意見の出方が変わってくることもあるので子ども・若者の立場に立って考えることが重要です。

小学生には具体的で身近な言葉、中高生には抽象的な課題や未来像を扱うと効果的です。

## Q6.意見を聴く時間が限られているとき、どうしたらいいですか？

一度に完璧を目指さず、「短くても、対話できる場をつくる」ことが大切です。短時間のヒアリングや付箋ワークでも、次につなぐサイクル設計ができていれば十分意味があります。何でもかんでも短時間で聴くのではなく、その時間内で話して欲しいことを想像して、場の準備をしましょう。

## Q7.子どもがあまり話してくれないときは、どうしたらいいですか？

無理に引き出そうとせず、まず「安心して沈黙できる空気」をつくります。

短い相づちや「うなずき」「書く」「描く」など、非言語的な表現を尊重することも有効です。

## Q8.大人（教員や保護者）が同席していると、子どもが話しづらいときがあります。どうすれば？

可能であれば控室をつくり会場を分ける、距離を取る、見えにくい配置にするなど、空間設計を工夫しましょう。とくに学校や教育について話してもらうときに、教員がいると子どもは意見が言いづらい傾向があります。

# 子ども・若者の意見聴取をめぐるQ&A

## Q9.聴取の内容に個人情報やセンシティブな話が出たらどうすれば？

記録の際には個人が特定されないように匿名化し、必要に応じて関係部署と連携します。また、虐待や安全に関わる懸念がある場合は、セーフガーディングの観点から速やかに関係機関に報告・相談します。

## Q10.聴いた意見をどうやって市の施策に反映すればよいですか？

単発の聴取で終わらず、「意見→整理→反映→フィードバック」のサイクルを設計しましょう。

職員間で共有し、次年度の計画・事業評価に反映できる仕組みづくりが重要です。

# 子ども・若者の意見聴取をめぐるQ&A

## Q1 1.意見聴取を担当していない職員も関わる必要がありますか？

はい。こども基本法では、すべての「こども施策」に子どもの意見反映を図ることが義務とされています。担当外でも、日々の業務の中で「子どもの視点を意識する」ことから始められます。

## Q1 2.子どもの声を聴くことに抵抗がある職員もいます。どう伝えれば？

市民・住民の声を聴くことと同じように、「特別なこと」ではなく「施策の質を高めるための方法」として伝えるのが効果的です。聴くことで、より現場に即した政策づくりができる。その実利的な面を共有しましょう。

また、子どもの声を聴いたことで施策に役立った！という成功体験を庁内で積み上げていくことも重要です。